

開設年度		開講部局	
2013		共通教育	
科目名			
日本の経営思想			
英語科目名			
Management thought of Japan			
前後期	開講区分	科目形態	単位数
前期	毎週	講義	2
(2 5 年度以降入学生) 中分類		(2 5 年度以降入学生) 小分類	
b. 知力：人文・社会科学		11. 経済・経営を学ぶ	
(2 4 年度以前入学生) 大分類		(2 4 年度以前入学生) 中分類	
教養科目		分野1	
受講学部学科			
全			
担当教員		担当教員所属	
吉田健一		稲盛アカデミー	
連絡先 (TEL)		連絡先 (MAIL)	
099-285-3756		k5621643@kadai.jp	
オフィスアワー (授業時間外の対応)			
毎週水曜日午後 事前に連絡を頂ければ、正規のオフィスアワー以外の時間であっても対応致します。			
共同担当教員			
メインキーワード		サブキーワード	
授業概要 (目的・内容・方法)			
<p>本講義では、日本の経営思想の特徴を理解することを目的にし、石田梅岩の石門心学に遡り、近世、近現代の代表的な経営者の思想を取り上げる。取り上げる人物は鈴木正三、石田梅岩、渋沢栄一、松下幸之助、稲盛和夫などである。石田梅岩は『都鄙問答』、渋沢栄一は『論語と算盤』、松下幸之助は、『人間を考える』、『経営心得帳』他の書物、稲盛和夫については『経営12カ条』や『生き方』、『働き方』を中心に講義する。</p> <p>本学の卒業生、稲盛和夫氏についても、近現代の代表的な日本の経営思想家との位置付けで最後に触れる。それぞれ人物の生きた時代背景やその人物の生き方にも触れ、その生き方 (思想) がどのようにその経営思想に影響を与えたかを講義する。その際、それらの思想の背景にある、(日本に特有の) 仏教、儒学、神道との関係にふれ、その労働観、利益観、資本観といった部分にも焦点を当てる。</p>			
学習目標			
1. 日本の近現代の経営者と経営思想について学び、資本主義の本質をどう捉えるか考え、今後の日本のあるべき資本主義の方向性、経営のあり方を自身で考える。			
2. わが国の近世以降の経営に対する思想、考え方、資本主義の捉え方には独特なものがあり、それらの思想の背景にあるものを理解し、それらの思想に基づく、その組織論・人間論・資本主義論の特徴と利点を理解する。			
授業計画 (1 5 回に分け、回数、授業内容、自学自習等)			
1. はじめに 日本の経営と日本の経営思想			
2. 石田梅岩1 石門心学にみる商人道徳			
3. 石田梅岩2 石門心学にみる商人道徳			
4. 石田梅岩3 石門心学にみる商人道徳			
5. 渋沢栄一1 近代日本資本主義と「道徳経済合一説」			
6. 渋沢栄一2 近代日本資本主義と「道徳経済合一説」			
7. 渋沢栄一3 近代日本資本主義と「道徳経済合一説」			
8. 松下幸之助1 松下の人間観と経営			
9. 松下幸之助2 松下の人間観と経営			
10. 松下幸之助3 松下の人間観と経営			
11. 稲盛和夫1 その人間観と経営			
12. 稲盛和夫2 その人間観と経営			
13. 稲盛和夫3 その人間観と経営			
14. 稲盛和夫4 その人間観と経営			

15. まとめ 資本主義の今後を考える

授業外学習(予習・復習)

受講要件	成績の評価基準
日本の近現代の経営者、経営者の人間観や社会観、資本主義観に関心を持っている事が望ましい。	(1) 毎回のフィードバックシート(50%) (2) 期末レポート(50%)を総合的に評価。 暗記による知識の定着を問うものは実施せず、感じたこと、考えた事をどれだけ自身の言葉で表現できるかをフィードバックシート、レポートで問う。オリジナリティを評価の対象とする。但し、レポート執筆に当たって最低限の知識は必要となる為、講義には3分の2以上出ることをレポート提出の条件とする。
教科書	参考書
『日本の経営思想』(吉田健一・鹿児島学術文化出版・2011年)	『都鄙問答』石田梅岩・岩波文庫、『論語と算盤』渋沢栄一・国書刊行会・昭和60年、『公益の追求者・渋沢栄一』渋沢研究会編・山川出版社・1999年、『商売心得帖』松下幸之助・PHP文庫・2001年、『経営心得帖』松下幸之助・PHP文庫・2001年、『経営のコツここなりと気づいた価値は百万両』松下幸之助・PHP文庫・2001年、『実践経営哲学』松下幸之助・PHP文庫・2001年、『稲盛和夫の哲学 人は何のために生きるのか』稲盛和夫・PHP研究所・2001年、『生き方』・稲盛和夫・サンマーク出版・2004年、『ガキの自叙伝』稲盛和夫・日本経済新聞社、『君の思いは必ず実現する』稲盛和夫・財界研究所・2004年、『稲盛和夫の実学』稲盛和夫・日本経済新聞社 他多数。講義の都度紹介予定。

その他